

京鹿子

昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可
平成十九年九月一日発行
通巻九六七号（毎月一回一日発行）



9月号

昭和の日 丸山佳子

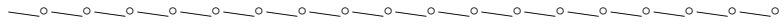
嵯峨立夏草は草づれ木は木づれ

花は葉にうしろ髪引く名宝展

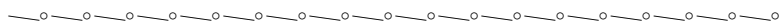
鶯もいささか上手にお日柄も

根つからの上り藤にてあなかしこ





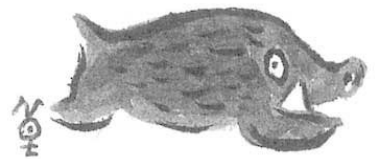
声のなきものに学びて昭和の日
緑の日有料無料の椅子にざし
大みどり桃山陵では洗心のみ
蛇穴を裏参道の草が待つ
ボートレース琵琶湖は知事のお服袋
母の日や雀百まで口紅を



豊 田 都 峰

清響集 その七十七

ねむ咲くや夢に入りくる水の音
合歡咲いて谷の扉ひらけひらけゆく
糸とんぼ風あやを抜け水あやへ
こもれ日に蝶同化して幕のあく
鉾 灘子高澄み町屋の宵あかり
源流のふかみへおちてゆく蛍



秀華採集

干潟かなポテトスープのあたたかさ

矢野 千佳子

まず「干潟かな」とおいたことを評価する。なぜなら「あたたかさ」が心象性を帯びるからである。単なる物理的なあたたかさにおわらせないところである。

一と群の踊子草の客となる

森 洋子

無灯火の君が見えない梅雨の闇

横田 萌

前句の「客となる」に作者の草花、特に踊子草への思い入れがあり、後句の「梅雨の闇」との組み合わせがたいへいよく、君への作者の関わりあいが見えてよ。

鈴鹿 仁

ひぐらし

新茶汲むこれより先の沙汰なりし
クレマチス空へ一意の蔓のばす
蝸やよすがの山のひとつ雲
ひぐらしのいつぽんの木の故郷かな
手花火にひとつの想ひこぼれ落つ
機しほと謂ふ切なる時間遠花火
かけまくもかなかなの森透き通す

近 詠

宇都宮滴水

風

かくかくと引算だけの蟬の里
青ふくべ少年怒れば漢の貌
ことば一つ捨てて立夏の風ひろふ
沖に雲生れ飛魚らの波となる
植田へとつづく径あり風のみち
明易しいつもの家の煙出し
耳底の音の深さや遠水鶏

神麓集



烏瓜死の刻の男ぶらさがり
流星をバケツに入れて洗つてみやう
露草や別れの涙ダイヤモンド
虫時雨一泣きして笑ひましよ
れもんれもんれん掌の長い時間

新関 一杜

我が君はちよにましませ苔の花
鶉が潜る千ひろの底のさざれ石
ささざれ石巖にそだち苔むせる
かぎりなきみよの栄えを鶴と亀
うごきなく常盤青葉の夏木立

林 日圓

日に月に重ぬる齡夏立ちぬ
思はざるはや辛寿とや更衣
着古りたる柄に思ひ出更衣
父の日や欲しきものなき此の齡
茶毒蛾の毛虫の列に威嚇さる

北村 香朗

夏は来ぬ
雲流る西空薄暑尾根の杉
高か低く西空つばめの雲茜
山薄暑雲夕光の西の寺
夏蝉や里田しづかな雲の影
葉毎その雀の背丈夏は来ぬ

丸山 冬鳳

睡蓮の余白の水に亀の首
よき皿にかなふ翠微や鮎の宿
火蛾死すや己れの影を追ひつめて
蛾眉の月西空に透く青網戸
仮の世の一と日の遊び目高の子

藤岡 紫水

夏怒涛水平線の右下り
脱藩の文は届かず落し水
祖谷万緑ひとり操る落し水
万緑やアニメ特急窓席に
葭切のこゑひかりだす四万十川

夏怒涛 和田 照海

神麓集



鶯や十七義士の遺髪塔
母子草揺れ素覚尼の五輪塔
おびんづる入口狭しつじ咲く
撫仏とは大半臥仏つじ燃ゆ
山吹の象る水子地藏群

角直指
松田都青

万緑にもまれたあとは石になる
杜若深い女になりきれず
なり切つてしまふ怖さの水中花
鮎つまみながら読みあひる革命史
万緑の裏側ばかり見て飽きず

沙羅の花昨夜の静かな心引く
夏日燦弦張り頃の鯉節
吾憎み切れざる蛇の口中ピンク
灯台や梅雨明く入るの国長し
自分史に加ゆ曝書の芳書数

彌寝瓶史

青葉旅 丹生をだまき
柏餅賢兄愚弟仲の良き
推敲に句帳をよごし春も過ぐ
青葉旅一番軽い靴を選び
杉山の裾金茶なす竹の秋
雨傘並ぶ表紙絵 六月号

青葉旅
丹生をだまき
竹貫示虹

母子手帳
満月の抽斗にある母子手帳
われわれを出てわれひとり蟲の闇
月涼し薯に爵位のありにけり
淋しくて畦にかたまる曼珠沙華
爽涼や武家屋敷町人を見ず

窓に風来るたび匂ふ栗の花
紫陽花やセレブ気取りの化粧直し
老鶯のひねもす謡ふ自適かな
青蛙喜々と喚び交ふ雨催ひ
夏の夜の酸素吸入ばびふべ

川崎光一郎

神麓集



青葉冷え蛸やきの香のいづくから
萩野 千枝
葵まつり分け入つても人の山
若竹や眞実事実の差を論づ
樹も腕も水欲る季節かたつむり
から梅雨と荒梅雨競ふ雲の綾

奥村 鷹尾

ほつほつと苔の花芽も拡がれり
錦木に山茶花白花散り混り
錦木の花屑さはに苔飾る
佐保堤葉桜蔭は主婦の座に
曾孫独りバスで来るてふ新学期

コブクロの唄 北川 孝子

段差なき我が家寧かりみどりの夜
緑濃し己の道行くわが歩み
丸木椅子はやも濡れいろ緑冷え
梅雨兆すコブクロの唄またよかり
冷コーヒー優柔不断のふたりかな

老鶯に案内され行く嵯峨の奥
船越 美喜
風透るセルの感触いまさら
裁ち縫ひを忘れし指や梅雨じめり
鮎鮎を泳ぐ形に皿にのせ
つばめ来る胸の中から明るくて

岩崎 憲二

群遊のメダカも秩序サツト消ゆ
梅雨も又恵みとあらば是非もなし
五月雨に「濡れて行こうと」幕下りる
「気の毒に」床に客なし梅雨に入る
梅雨傘を柳へ開き露地を出る

出雲路 山田をがたま

村繁り備中と付く無人駅
風垣の松の芯伸び邸威容
おきまりの出雲の宿の蜷汁
創建の巨柱展示す若葉照り
太古社の雛形は五種夏きざす



京鹿子集

豊田都峰選

白さぎの飛翔や残花明りかな

消息や不意にかすめる岩つばめ

干潟かなポテトスーパのあたたかさ

日時計の影にも薄暑ありにけり

あいまいな予感一揺れ山桜桃の香

紫陽花に同じ雨降る一周忌

冷静になり緑蔭を出でにけり

語部の淡海哀史やほととぎす

物語佳境に入りて明易し

一と群の踊子草の客となる

横浜 矢野千佳子

大津 森 洋子

無灯火の君が見えない梅雨の闇

濡れ紙に描いた様な梅雨の月

緋目高の目立ちたがりが浮く水面

百才まで生きる予定の目高鯛ふ

青梅雨やふところ深き袋町

いつまでも子のままでなし明易し

田植終へみちのり遠きことを知る

夏帽子早起きの妻一仕事

兄は起きてくわがた虫の安否観る

口笛を吹く得意顔白い靴

京都 横田 萌

アリソナ 伊吹 之博